

分館長のおすすめ本



『ストーンサークルの殺人』

M・W・クレイブン/著 東野さやか/訳 早川書房 2020年

普段自分では選んで読まない海外ミステリー小説を家族の勧めで読んでみたところ、序盤から目まぐるしく変わる展開、連続殺人事件の真相を追っていく登場人物の姿に、思わず夢中になり読み進めていきました。自分の価値観の外側に目を向けるきっかけにもなった家族にも感謝しつつ、一度手に取っていただきたい一冊です。

同著者による続編も刊行されています。

普段はなかなか選ばないような本、「読んでみると意外にいける！」ということがあると思います。

図書館がその一助となれば幸いです。



休館日のお知らせ

6月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

7月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

※○の付いている日が休館日です。 ※土日祝日は午後5時までの開館です。

《発行》所沢図書館所沢分館 所沢市元町 27 - 1 ☎04-2923-1243
指定管理者：株式会社ヴィアックス

図書館だより No.117 (通巻)

とこぶん通信

2025

6・7

イベント掲示板

6月

映画会

こども映画会 10時30分～(10時15分開場)

6/8(日) 『3匹の子ぶた』

6/15(日) 『つづきのおはなし』

市民映画会 14時～(13時30分開場)

6/8(日) 『哀しみの終わるとき』

6/15(日) 『善人の条件』



おはなし会

6/7(土) 6/21(土)

親子おはなし会

6/27(金)

映画会

こども映画会 10時30分～(10時15分開場)

7/13(日) 『シンデレラ』

7/20(日) 『恐竜超世界 第2集
史上最強! 海のモンスター』

市民映画会 14時～(13時30分開場)

7/13(日) 『めぐり逢い』

7/20(日) 『キッチン』

おはなし会

7/5(土) 7/19(土)

親子おはなし会

7/25(金)



※おはなし会はいずれも10時30分から開始

※映画会は当日先着順です。満員時は入場できません。

イベントレポート

「丸山正樹氏の語る小説で伝えたいこと」 開催しました！

5月21日（水）実施

『デフ・ヴォイス』や『夫よ、死んでくれないか』の原作者であり、所沢にゆかりのある作家の丸山正樹氏をお招きして、所沢ハーティア移設 15 周年記念講演会を開催しました。

幼少期の愛読書や学生時代に影響を受けた倉本聰氏、山田太一氏の作品等を取り上げ、小説家に至るまでの苦労やエピソード、そして作品の裏話などをお話しいただきました。

講演後は来場者のサインにも応じていただき、とても貴重なひとときでした。



参加者の声

貴重なお話が
聞けました！

もっと他の作品も
読んでみたい！

とこぶんからのお知らせ CHECK

7月の展示イベント「本のまくら」

7月1日（火）～7月20日（日）
「ほんのまくら」とは2012年に書店で始まったイベントです。

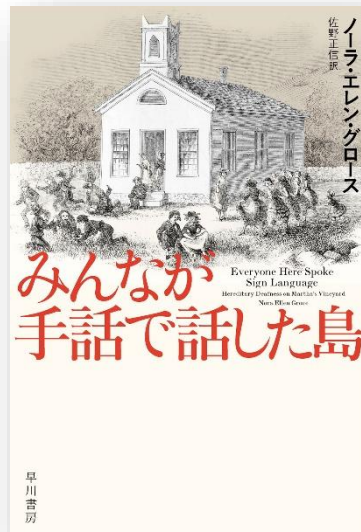
本の最初の一文を印刷したブックカバーをかけ、
中身が見えない状態で、展示します。

気になる一文から、本を選んでみてください。

職員おすすめ本と、利用者のおすすめ本を展示
する予定です。



本のまくらたち



『みんなが手話で話した島』
ノーラ・エレン・グロース／著
早川書房

『みんなが手話で話した島』

ノーラ・エレン・グロース／著

早川書房 2022 年

映画『JAWS』のロケ地であり、現在は多くのセレブの別荘地となっているマーサズ・ヴィンヤード島には、20 世紀初頭まで、遺伝性のろう者が多く暮らしており、聞こえる、聞こえないにかかわらず、住人のほとんどが島独自の手話言語を用いて日常的に会話をしていました。島ではその人がろう者であることはさしたる問題ではなかったため、その記録がほとんど残っていない。という事実が、島のろう者と聴者が「共生」していたことを物語っています。障害とはまさしく社会が作っているものなのだと痛感しました。

著者の丹念な調査にも
注目したい文化人類学
の名著です。

推し本
とこぶんスタッフ選

『ルネ・マグリット 国家を背負わされた画家』

利根川由奈／著 水声社 2017 年

マグリットの不思議な作品は有名ですが、ベルギーの画家だというのは意外なのではないでしょうか。

いかつい印象を受けるタイトルですが、はじめに当時の文化政策、独立後のベルギーの複雑な状況がまとめられています。作品のイメージの分析から、フランドル地域の美術史における系譜をシュルレアリズムの「幻想性」で繋げていき、当時から人気画家であったマグリットの対外的な文化政策での役割を考察しています。

図版も多く、マグリットを切り口とした読み応えのあるベルギー美術史です。



『ルネ・マグリット
国家を背負わされた画家』
利根川由奈／著 水声社